

「現地を訪問して想うこと」

2011年3月11日に発生した東日本大震災の様子を伝えるテレビの凄まじい映像を今も忘れることができません。巨大な津波が家や自動車を見る見るうちに押し流していく様子に息を呑み、大きなショックを受けました。

そして、福島原発の重大な事故、目に見えない放射能の恐怖、3年半が過ぎた今も12万人余の福島県民が避難を強いられているという現実があります。

私は今回の「東北応援ツアー」参加者の中では最年長(1943年生まれ)のようでしたが、元気なうちにぜひ被災地を訪問して自分の目で耳で実態を確かめ、少しでも復興のお手伝いのできたらと思い、応募しました。

これまでから復興支援の募金や中学校の同窓会で被災された酒屋さんから日本酒を取り寄せたりしてきましたが、現地の実情を実感しないままの取り組みでした。

ツアー1日目に川内村の遠藤村長さんから、被災以後復興に向けての取り組みをお話いただきましたが、最前線でリーダーとしての判断に苦労された様子が伝わりました。

放射能の影響、失業者の増加、事業所等の休業や廃業、家族の崩壊、村に戻る人と戻らない人との分断等の様々な困難から復興を目指して取り組んでこられたご苦労は大変だったことと思います。

遠藤村長さんのお話の中で感銘を受けたのは、「お金だけの問題でなく、安心して食べてもらえるように全袋検査をし、客観的データをそろえて出荷している福島のお米を、おいしいと言って食べてほしい」という願いでした。

今年は全国的に米価が下がり、風評被害で福島のお米はさらに値下げを強いられる可能性があります。米だけでなく福島産というだけで、農林漁業等の様々な産物が買い叩かれる恐れがあると感じました。

もう一つ心に残ったのは、「被害の補償をさせることも重要だが、生きる意欲や目標を失わないことがとても重要であり、そのための施策をしっかりと行うことが大切である」と強調されたことです。

「震災関連死」と言われる人が、福島県で1700人以上居られるという事実も重いものがあります。人間、生きる意欲や目標がなくなるほどつらいことはありません。

復旧や帰村等、新しい村づくりに向けて取り組んでおられる遠藤村長さんや関係の皆様々に敬意を評したいと思います。

18日の夕刻からの勉強会では、福島県企業局長の飯塚さんから「ふくしま復興のあゆみ」について、資料を基に説明を受けました。

避難者数は減少してきているものの、まだ12万6千人以上居られること、若者が減少し高齢化が進んでいること、汚染廃棄物の保管問題や中間貯蔵施設の遅れ、海の汚染の心配、風評被害(食物、観光等)、労働力の不足、等々多くの課題について説明されました。

「これからも長い道のりが続くと感じます」という飯塚さんの言葉に実感がこもっていました。

「全国的には大震災や原発災害への関心が薄れ風化しつつある。忘れられることは五つ目の災害だ。知る努力を忘れないでほしい。」と司会をされた福島県校友会幹事長の馬場さんの言葉が印象的でした。

三春デコ屋敷での絵付け体験や好天のもとでの裏磐梯・五色沼散策という楽しい企画も入れていただき、福島県の伝統的な芸術や風光明媚な自然に触れることができ、有意義に過ごさせていただきました。

福島県の良さや現地でがんばっておられる方々のことも、できるだけ多くの人に伝えていきたいと思います。

後になりましたが、私たちのために企画・運営等お世話になった福島県校友会の皆様、復興支援特別委員の皆様、校友会事務局の皆様はじめ関係の方々に心から感謝申し上げます。

これからも東北大震災や原発災害のことを忘れることなく、微力ながら応援していきたいと思います。

糸井 利則

1967年 経済学部卒業 C 福島県相馬コース参加